

3月2日(日)

令和七年度 B日程入学試験問題

文学部（日本文学科・中国文学科・外国語文化学科・哲学科）、
神道文化学部、法学部、経済学部、人間開発学部、
観光まちづくり学部

現代文

—注意事項—

- 1 問題は1ページから33ページ、解答用紙は一枚である。
2 次の指示にしたがうこと。
3 文学部は**1・2**を解答すること。
4 神道文化学部、法学部、経済学部、人間開発学部、観光まちづくり学部は**1・3**を解答すること。
3 解答はすべて別紙解答用紙に記入すること。
4 試験時間は六〇分である。

この問題は、解答欄 1 ～ 10 に解答すること。

次の文章を読み、後の問いに答えなさい。(50点)

折口信夫の作品とは、ずい分長いあいだつき合ってきたような気がする。ゆうに四半世紀は越えるのではないか。そのときに眺めた折口信夫の姿もまた、ずい分転変を重ねている。どれが本物の折口で、どれが偽物の折口なのか、その臨界が定かでないような錯覚に襲われたのも、一度や二度ではなかった。

折口信夫とは、何者か。

今では、^(a)天然の無頼派、という印象が非常につよい。⁽¹⁾慇懃無礼の無頼派、といい換えてもいい。もっとも私は、生前の折口信夫には一度も出会ったことはないのであるから、人によっては右の評言をきいてたんなる机上の空想といって、非難するかもしれない。

無頼派といえば、戦後焼け跡世代の私などには、さしずめ I 、 II 、 III などの名が浮かぶ。しかし今にしてあらためて振りかえってみると、かれらの無頼派ぶりも折口信夫の無頼派気質にくらべて浅く、狭いようにみえてしかたがない。なぜなら折口の「無頼」には歴史の深度がかぶさり、伝承世界の無数の経験がずっしりたたみこまれているようにみえるからだ。

もう一つ、いっておかなければならないことがある。右にのべたこととほとんど表裏をなすような話なのだが、折口はいつも自分の欲望の根元に光をあてることを怖れなかった。それはまったく生得的なものだったというほかはないが、そこが同じ民俗学という領域で仕事をした柳田國男とは根本的に違う。柳田はひたすら欲望を隠蔽しようとしたが、折口は欲望をむしろ露出させ、白日の下にさらけだそうとした。いつでも見得をきって、ハードな無頼派を演じようとした。

もしもそうだとすると、それではかれはいったいいつ無頼派宣言をしたのだろうか。それがよくわからない。^(b)人知れず宣言の雄叫びをあげていたはずであるが、それがどの時点であるのかがよくわからない。だがむろん、手がかりがないわけではない。昭和十一年から十四年にかけておこなわれた、ある大学での講義録である。

それは國學院大學の郷土研究会の席上で話されたもので、『全集・ノート編』の第七巻に収められている。五十歳から五十三歳にかけての時期だ。このとき折口学の体系はすでに出来上り、その民俗学や芸能史の骨格も定まっていた。「国文学の発生」や「大嘗祭の本義」も書き終え

ている。昭和十四年の五十三歳には「死者の書」を発表してもいる。國學院大學教授、慶應義塾大学教授を歴任して、かれを信奉する学生たちの輪も広がりをもせていた。

さて、その問題の「講義録」である。そのなかで、かれは民俗学を「心意伝承」「周期伝承」「造形伝承」の三つの分野に区分している。周期伝承とは、要するに年中行事のことだ。造形伝承はそれについて、かまど、門、刀などの造形された民俗構築物や民具を指す。ところがその二つの分野にたいして、折口がもっとも重視したのが心意伝承であった。なぜなら周期伝承や造形伝承は変化し、やがて衰滅していくが、心意伝承は人びとの心のなかに⁽²⁾執拗に残存し、社会や制度の内部に目に見えない強い影響、消しがたい爪あとをのこすものだからである。

その折口の「心意伝承」論をみると、そこにあまりにも予想外の論題がひしめいていることに驚かされる。アトランダムに羅列してみるだけで、心の鬱を吹き払うようにそこにぶちまけているような気配が伝わってくる。

姦通、敵討ち、盗み、憎しみ、嫉妬、憤りと道徳、任侠、挨拶、礼儀、仁義、義理、喧嘩、口論、色好み、……

心の内部に発生するテーマを、手当りしたい眼前に投げ出しているのである。かれは一時的な衝動にかられて、そうしたのだろうか。おそらく、そうではあるまいと思う。なぜならわれわれは、右にあげたテーマのそれぞれを、折口の『全集』に収められている論文の論題のなかにすぐにでも見出すことができるからだ。一篇の完結した論文にまで練りあげられないまでも、多岐にわたる諸論文の文中に陰に陽に顕現する論題であることだけは間違いない。たとえば「敵討ち」や「色好み」の論が、いわゆる折口学もしくは折口民俗学のなかで逸すべからざる刺激的な地位を占めていることは、あらためていうまでもない。

いまあげた折口心意伝承の各論題を子細に眺めるとき、そこから二系列の問題群が立ちあらわれてくるように、私は思う。第一の系列が、姦通、敵討ち、盗み、嫉妬、喧嘩などにみられるテーマである。いずれも人間の心の深層からくみあげられたものだ。心の暗部への関心といってもよい。デモニーニッシュな衝動への着眼である。私はこれらのテーマをつらぬくものが、折口における「フロイト」的関心であったと考える。折口信夫もまた時代の子、その青春時代に、ヨーロッパからもたらされたフロイトの毒をその全身に吸収したことがあったのではないだろうか。

それにたいして第二の系列が、道徳、任侠、挨拶、礼儀、仁義、義理などの問題群ではないか。民俗社会を支える制度、秩序にかかわるテーマだ。共同体の人事や行事を儀式化するための心的装置である。心理的な情動の背後にアナキーな攪乱要因を想定し、それを抑制しコントロールする社会規範であるといつてよい。これを私は、さしあたり折口学における「デュルケム」的関心と呼ぶことができると思っている。

もつとも、折口信夫がはたしてデュルケムを読んでいたのかどうか、——それはかれがはたしてさきのフロイトを読んでいたのかどうかという疑問と並んで、かならずしもはっきりしない。しかしその事実関係がどうであれ、折口信夫もしくは折口学からは右の「フロイト」的関心に

もとづくテーマ群と「デュルケム」的関心にもとづくテーマ群をはっきり析出することができるのである。

ここで私は、折口が任侠とか仁義（あるいは義理）といった問題に並々ならぬ興味を抱いていたらしいことを、大変面白いと思う。現にかれには、よく知られた「ごろつきの話」（昭和三年）とか「無頼の徒の芸術」（昭和十一年）といったとおきのエッセイがある。いずれもヤクザや芸能の世界、遊興、放蕩の心意に鋭い探針を下ろした作品である。とはいってもそれは、かれがたんに反道德の分野にそれとして興味を抱いていたからなのではない。そうではなくて、民俗社会の真相を掘りおこすためには、その底にうごめく悪徳を⁽³⁾剔抉しなければならぬとする確信が、かれにあったからである。

たとえば、昭和九年に書かれた「生活の古典としての民俗」において、折口はつぎのようにいつている。

学問の対象には、いつもいいものだけ選ばいいといふ訣^{わけ}には行かぬ。悪い事でも、人間生活にある事なのだから、やはり、研究しなければならぬ。此両端が相まつて初めて、人間の生活、社会の機構^{わく}が訣^{わけ}る。即、道德の研究には、悪徳の研究が必要なのと同じである。

折口はここで「道德」ということを、ただかりそめにいつているのではない。人間社会につきまとう^(c)「悪徳」の照り返しのなかで、それを考えようとしているからだ。民俗宗教的なタブーやもの忌みの問題も、そのような感覚を抜きにしては語れないであろう。折口信夫におけるデュルケムの問題意識といったのも、そのような文脈においてであった。

ただ同時に、折口は右の「生活の古典としての民俗」のなかで、こうもいつている。すなわち、第一に民俗は、現在のわれわれの生活の秩序をつくった基本である。そういう点では民俗はクラシクな性格を本来的にもつてゐる。しかしながらそれだからこそ、第二に、そのような民俗は社会の秩序の維持のためには無力である。というのもそのクラシクな生活様式は宗教でも道德でもないからだ。宗教や道德のような力をもたない、たんなる生きるための生活の古典だからである、と。

逆にいえば折口はここで、道德や宗教が社会の秩序や規範をつくるうえでいかに重要なものであるかということのをべていることになるだろう。そしてその道德や宗教の威力を明らかにするためにこそ、反道德や悪徳の世界にも注意しなければならぬという立場をとつてゐるのである。生活の古典としての民俗そのものには、そのような問題に道筋をつけるような可能性がかならずしもあるわけではない。なぜなら^(d)民俗は生活^(d)を律するための古典ではあつても、宗教や道德におけるような社会的な力はないからだ。

ほぼ、そういうことになるであろう。そしてこのように考えてくるとき、折口信夫がどうして姦通や盗み、憎しみや嫉妬のテーマに異常な関心をつのらせ、また任侠や仁義、喧嘩、口論や挨拶、礼儀そして道德のような問題に惹きつけられていったのがわかる。かれがどうしてフロイトやデュルケムによって提起されていた課題に関心をもつようになったのか、その内的な動機が了解されるのである。

折口におけるフロイト的関心というのは、社会の表層を彩る現象から人間の深層にむけられた心的ベクトルをあらわしていると思う。それにしたいてかれのデュルケムの関心は、人間の心の底に潜むデモニッシュな衝動を、社会の儀式的秩序に繋留しようとする心的ベクトルをあらわしているといえるだろう。このように折口学の方法には、カオスからコスモスへむけて上昇する探針と、コスモスからカオスへと下降していく探針が交錯してたたみこまれている。その意味において、たとえば、かれが昭和二十四年に書いた「道徳の発生」という論文と同二十六年に発表された「仇討ちのふおくろあ」は、右のカオスとコスモスの逆対応のテーマに寄せていえば、まさに表裏一体の論題だったということができるのである。

さきにも少しふれたことだが、かれはすでに昭和三年に「ごろつきの話」という文章を書いている。まず「ごろつき」の語義についてであるが、それは雷がごろごろ鳴るように威嚇して歩くからだというような説があるが、実はそうではない、石塊がごろごろしているような生活をしている者のことだ、といている。なるほど面白い解釈であるが、その石塊のごろつきが、鎌倉から室町の時代にかけて「武士」へと出世したり、やがて徳川時代になって「無宿者」「無職者」「無職渡世」などへと姿形を変えていったといっている。今日われわれの問題としていえば、さしずめ「フリーター」や「ホームレス」などという新人類種などもこの「ごろつき」のなれの果て、ということになるのであるうか。

ともかく、その無頼漢が武士へと出世したり、あるいは無宿者へと零落していく上で重要な役割をはたしていたのが「野伏」「山伏」の生活形態であった。ごろつきの気分を正統に継承し、発展させた浮浪者団体の主役がそれであった。そしてその浮浪性のゆえに、かれらはしばしば巡遊芸能民の「うかれ人」や「ほかひ人」と混同されることになる。

山伏の生態はさまざまであるが、その第一はかれらが団体をなして歩いたという点に求められるだろう。まず人里離れた山奥に根拠をすえ、つね日ごろは海道を上り下りして、豪族たちに取り入って家臣となったり、土地を貰ったりしている。そのうち力を伸ばした者はその豪族にとつて替ったりもした。

つぎにかれらは、山中で鍛練した法力を示して村人たちの意を迎え、舞いや踊りや歌を披露して芸能の伝播、発展に大きな貢献をしている。だが、その浮浪性が無法性と結びつくとき、かれらはいつでも治外法権下の悪業の代名詞とみなされるようになった。無頼漢（ごろつき）の野性が世間の耳目をそばだたせることになるのが、そのようなときだ。

たとえば逆法螺さかばらを吹いて呪いをする山伏、土地をもたず盗みを常職とする「すり」「すっぱ」「らっぱ」のたぐい、などがそれにあたる。「すり」とは単独の盗人、「すっぱ」は狂言では田舎人をだます悪党、「らっぱ」は団体をなす盗人で、戦国の世には傭兵となり親分をもっていた。

このような無頼漢はやがて出世して武士になったとききといったが、その武士のライフスタイルすなわち武士道には、歴史的にいつて二つの

タイプが存在したと折口はいつている。

一つはもちろん正統的な武士道であって、徳川時代になって概念化されたものだ。儒教によって道徳的に陶冶された山鹿素行などの士道である。それにたいしても一つがその素行以前のもので、野伏、山伏の系統につながる士道である。そこに生みだされたのが「変幻極まりなきもの、不安にして、美しく、きらびやかなるものを愛する」道徳すなわち「ごろつきの道徳」なのだという。

折口はここで、士道には二つの士道があったように「道徳」にも正統的な道徳とごろつきの道徳があったとって区別している。とりわけ後者の道徳を、今日の道徳観をもって解釈してはならぬと主張している。そのごろつきの道徳観について、つぎのような話を持ち出しているところが面白い。

戦国大名の北条早雲（一四三二―一五一九）が、三浦荒次郎を攻めたときのことである。その三浦の城が落ちるときくや、早雲の家来十幾人かが三浦の城の方角を向いて、たちまち割腹して果てた。それというのも、かつてかれらは三浦方に捕らわれの身となっていたとき非常に好遇をえていたからだ。その恩に感じて、腹を切ったのである……。

この話を紹介しつつ折口は、「今日、それだけの雅量あるものが、果してあらうか」といい、後世の俠客やごろつきのなかには、多少ともこのような、一見無鉄砲にみえる俠気、すなわちさむらいたちの道徳観にさえ似たものが流れていたのだという。

無頼の徒というのは、常識的にいえば反社会的な人間のことをいう。反道徳的な行為をする人間のことだ。しかし折口において、この無頼漢はたんなるアウトローではなかった。たんに秩序から疎外されただけの反道徳的な存在ではなかった。なぜならかれらには、いまのべたように「ごろつきの道徳」ともいべき、気分本位の「雅量」がそなわっていたからである。今日の目からは量ることのできない道徳感情、である。

^(e) 折口がそれを「ごろつきの反道徳」とはいわずに、「ごろつきの道徳」といつているところに、とりわけ注意しなければならないのである。

こうして折口信夫は、このごろつきという生活形態のなかにいわば道徳と反道徳の契機をほとんど同時にみとめようとしていたのではないだろうか。かれにおける「フロイト」的関心と「デュルケム」的関心も、そのような発想のなかから誕生することになったのではないかと思うのである。

（山折哲雄『天然の無頼派』）

（注）○フロイト―オーストリアの心理学者。精神分析学を創唱した。

○デュルケム―フランスの社会学者。総合社会学を確立した。

○逆法螺―法螺貝を逆さに吹くこと。呪いの一種。

問一 二重傍線部(1)・(2)・(3)の意味として最もふさわしいものを、次のア～オの中からそれぞれ一つ選び、(1)は解答欄 1 に、(2)は 2 に、(3)は 3 にマークしなさい。

- | | |
|--|--|
| <p>(1)</p> <div style="border: 1px solid black; width: 20px; margin: 0 auto; text-align: center;">1</div> <p>ア 他者を認めているようだが、その実は関心がないこと
 イ 表面上は従う態度だが、その実は裏切っていること
 ウ 一見傾聴しているようだが、その実は理解していないこと
 エ うわべは礼儀正しく丁寧だが、その実は尊大なこと
 オ 外見は柔和なようだが、その実は苛烈な性質であること</p> | <p>(2)</p> <div style="border: 1px solid black; width: 20px; margin: 0 auto; text-align: center;">2</div> <p>ア 心が惹かれて断ち切りがたいさま
 イ 意見や態度を頑固に譲らないさま
 ウ 意に従わず逆らう態度をとるさま
 エ 幼い頃から刷り込まれているさま
 オ 思い入れなく実践され続けるさま</p> |
|--|--|

- (3)
- 3
- ア 罪を明らかにして裁くこと
 イ えぐり出しあばき出すこと
 ウ 真意を広く喧伝すること
 エ きっぱりと縁を切ること
 オ 当て推量で決めつけること

問二 空欄 I ・ II ・ III に入る無頼派の作家の名前としてふさわしいものを、次のア～コの中から三つ選び、解答

欄 4 に三つマークしなさい。

- | | | |
|--------|---------|---------|
| ア 安部公房 | イ 織田作之助 | ウ 梶井基次郎 |
| カ 武田泰淳 | キ 太宰治 | ク 野間宏 |
| | ケ 堀田善衛 | |
| | コ 三島由紀夫 | |
| | | オ 島尾敏雄 |

問三 傍線部 (a) の説明として最もふさわしいものを、次の ア～オ の中から一つ選び、解答欄 5 にマークしなさい。

ア 折口信夫は、民俗学という領域で取り上げ論じたテーマが自分の欲望に根差したものであることを、隠すことなく明白に提示するポーズを取り続けたが、それはもって生まれた性向によるものであったということ。

イ 折口信夫は、四半世紀の間に民俗学という領域で様々なテーマを取り上げ論じたが、そのときどきでテーマが常に転変し本物と偽物との臨界が定め難いのは、生まれつきの気まぐれによるものであったということ。

ウ 折口信夫は、伝承世界の無数の経験を背負って多くのテーマを取り上げ論じたが、それは民俗学という領域の根元に光を当てるために、ハードな無頼派の文学者たちの気質を真似たものであったということ。

エ 折口信夫は、自らの欲望に向き合うテーマを民俗学という領域において取り上げ論じたが、そのことに本人は無自覚であったため柳田國男のように隠蔽することなく、怖れることなくさらけだしていたということ。

オ 折口信夫は、自分自身の無頼への欲望を民俗学という領域において取り上げ論じたが、その無頼は生まれ育ちにより得られた歴史的な深みに裏打ちされたものであるため、同時代において抜きん出たということ。

問四 傍線部 (b) の説明として最もふさわしいものを、次の ア～オ の中から一つ選び、解答欄 6 にマークしなさい。

ア 完結した論文として提出されなかったためにみすごされてきたが、折口信夫が民俗学の中でもっとも重視した心意伝承の領域において「無頼」に関わるテーマに言及しており、折口学の全体をみてもその論題が陰に陽に現れることから、折口は早くから自身の心の鬱を吹き払うことを学問の目的としていたと確認できるということ。

イ 社会や制度の内部で目にみえないから気づかれないでいるが、折口信夫が区分した民俗学の三分野のうちもっとも重視した心意伝承の領域に「無頼」に関わるテーマが多く含まれており、折口の全集にもそうした論題を扱った諸論文がみいだせることから、自身の欲望の根元に光をあてることを目指していたことが確認できるということ。

ウ 直接的に論文の主題とはしていないために目立たなかったが、折口信夫は自身の民俗学の体系においてもっとも重視した心意伝承の領域に「無頼」に関わるテーマが多く含まれており、著作の論題にも多く用いていることなどから、早くから自身の欲望の根元に密接に関わる心の暗部への関心を強くもっていたことが確認できるということ。

エ 手あたり次第に羅列されたため理解されてこなかったが、折口信夫は民俗学においてもっとも重視した心意伝承の領域で「無頼」に関わるテーマに多く言及しており、また折口学においても、「敵討ち」や「色好み」など情動に関わる論が重要視されることから、折口は早くに刺激的な欲望と向き合っていたと確認できるということ。

オ あらためていうまでもないことであるから注目されてこなかったが、折口信夫は民俗学においてもっとも重視した心意伝承の領域に「無頼」に関わるテーマを多く設定し、またそうした論題に多岐にわたる諸論文の文中でも言及していることから、折口は人間の心の一時的な衝動への着眼を早期から設定していたと確認できるということ。

問五 傍線部(c)の説明として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、解答欄 7 にマークしなさい。

ア 折口信夫が無頼や芸術といった領域における悪徳に注目したのは単なる興味ではなく、人間の生活や社会の機構を学問の対象とするならばそうした悪徳を避けることができないため、それらを共同体の人事や行事の一環として学問の対象としたということ。

イ 折口信夫が無頼やヤクザといった反道徳の存在に注目したのは単なる興味ではなく、そうした悪徳に突き動かされる人間の心の暗部を対象として民俗社会の真相を掘り起こし、生活の古典としての民俗が維持する秩序に言及するためであるということ。

ウ 折口信夫が反道徳的なごろつきや芸能の世界に注目したのは単なる興味ではなく、そうした心理的な情動の背後にあるアナキーな攪乱要因を析出し、それを共同体が自身の社会秩序を支える制度として儀式化するに至った経緯を考えるためであるということ。

エ 折口信夫が任侠や仁義といったデモニッシュな衝動に注目したのは単なる興味ではなく、そのような感覚から民俗宗教的なタブーやものの忌みが発生し、共同体を支える社会規範として成立するにいたったという確信があったということ。

オ 折口信夫が遊興や放蕩といった悪徳の心意に注目したのは単なる興味ではなく、そうした悪徳を起こさせる衝動や情動を抑圧しコントロールするために共同体が生み出すに至った、道徳や宗教がもつ威力について論じるためであるということ。

問六 傍線部 (d) の説明として最もふさわしいものを、次の ア～オ の中から一つ選び、解答欄 8 にマークしなさい。

ア 生活の古典としての民俗は日々を生きるわれわれの生活の秩序の基本として尊重されるべきものであるが、そのような規範には反道徳や悪徳に対抗する実践は存在していないため、共同体に出現した反道徳や悪徳に対抗するには道徳や宗教に従属しなければならなかったということ。

イ 生活の古典としての民俗はわたしたち普通の人々の生活を成り立たせる規範として存在しているが、そのような狭い共同体に生きる普通の人々は社会的には力をもたないので、善悪の判断を付ける必要に迫られるような場面では宗教や道徳のように社会を維持する力を発揮しえないということ。

ウ 生活の古典としての民俗はわたしたちが受け継いでいる生活様式の基本であるが、そうした実践的な民俗は本来的に道徳や宗教とは相反する性質をもっているため、共同体における善悪の判断の基準として用いようとする反道徳や悪徳をも内包してしまうことが問題であるということ。

エ 生活の古典としての民俗はわれわれの生活の基本となる様式として受け継がれてきているものではあるが、それは本来的に社会や制度の内部に残存したクラシクな性格をもっているため、道徳や宗教のように現代の社会に対応して新たな秩序や規範をつくり出す可能性に乏しいということ。

オ 生活の古典としての民俗は現在のわれわれの生活の秩序の基となっている決まりごとであるが、その中心となっているのは日々の暮らしを成立させるための実践そのものであって、道徳や宗教のように共同体の問題に対して善悪の価値を判断し事象を決裁するような基準ではないということ。

問七 傍線部(e)の理由として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、解答欄 9 にマークしなさい。

ア 「ごろつき」と呼ばれる無頼の徒はさむらいたちの道徳観にも似た俠氣をもちあわせているため、折口はごろつきがたんなるアウトローではないと考えられる点に注目し、そうしたごろつき特有の俠氣が儒教によって道徳的に陶冶され、後世の正統的な武士道の基となったという経緯を「ごろつきの道徳」という語で表現しているから。

イ 「ごろつき」と呼ばれる無頼の徒は反社会的な人間であるため道徳心をもち合わせないが、折口はごろつきが単に秩序から疎外されただけの反道徳的な存在ではなく、もちあわせている気分本位の雅量が今日まで俠客の生活の古典として保たれていることに注目し、その民俗を「ごろつきの道徳」という語で表現しているから。

ウ 「ごろつき」と呼ばれる無頼の徒の活動は一般社会からは反道徳とみなされるものであるが、折口はごろつきが一般的な規範に従わないが彼ら自身の規範には誠実な行動をとる点に注目し、道徳と反道徳とが単なる二項対立ではなく、同源から生ずる相対する心の動きであることを「ごろつきの道徳」という語で表現しているから。

エ 「ごろつき」と呼ばれる無頼の徒は反社会的反道徳的なふるまいをする反面、変幻自在で美しくきらびやかなものを愛するという性質ももち合わせていることに注目した折口は、ごろつきが悪徳や悪業とともに美しい芸能もほとんど同時に生み出したという点をまとめ、その貢献を「ごろつきの道徳」という語で表現しているから。

オ 「ごろつき」と呼ばれる無頼の徒は常識的にいえば反道徳的な行為をする人間のことだが、折口はそうした反道徳を抑制しコントロールすることで秩序を生み出す共同体の心的装置に注目し、ごろつきの悪業が秩序に属する人間たちの道徳の規範を逆説的に生み出したことを「ごろつきの道徳」という語で表現しているから。

問八 問題文の内容としてふさわしいものを、次のア～カの中から二つ選び、解答欄 10 に二つマークしなさい。

ア 折口学の体系は昭和十一年から十四年にかけての時期には完成をみせていた。折口信夫は自身にとって重要な論となる「国文学の発生」や「大嘗祭の本義」はすでに脱稿され、民俗学や芸能史における構想も固められていた。同時期には小説である「死者の書」も発表されている。さらに教授として教鞭を執る國學院大學、慶應義塾大学では折口を慕う学生の集まりが広がりつつあり、折口はそうした学生に対して研究会の席上で講義を行っていた。

イ 郷土研究会における講義において折口信夫は、民俗学を三つの分野に区分する構想を発表している。季節ごとに行なわれる年中行事を中心とした「周期伝承」、家屋の建造物や道具類を対象とする「造形伝承」、人々の心の中に存在するものを対象とする「心意伝承」の三つである。折口は周期伝承や造形伝承は一時的な衝動により変化し衰退していくのに対し、心意伝承は社会や制度を形づくる指標として最後まで残るとして、もつとも重視した。

ウ 折口信夫の心意伝承の論題を検討すると、二系列の問題群を発見することができる。第一の系列は折口におけるフロイト的関心で、それらは姦通、盗み、嫉妬、喧嘩など人間の心の深層、衝動的な欲望と結びついたものへの注目である。第二の系列は折口におけるデュルケムの関心で、任侠、仁義、義理、敵討ちなど、情動を抑制して社会秩序を保つための心的装置への注目である。折口は同時代の読書経験からこうした関心をもつに至った。

エ 折口信夫のフロイト的関心とデュルケムの関心は、カオスからコスモスへの上昇とコスモスからカオスへの下降が対応し交錯する形で結びついている。論文「ごろつきの話」では折口は、ごろつきの語源を石塊がごろごろしているような生活形態にあると説き、その無頼漢たちが戦国時代から徳川時代に武士へと出世したり、無宿人や無職渡世へと零落したりする上で、「野伏」「山伏」といった浮浪者団体であったことが重要な役割をはたしたとする。

オ 山伏の生體の特徴は彼らが団体で浮浪したという点にあると折口信夫は説く。山奥に根拠を置いて海道を行き来し、豪族の家臣となったりその豪族にとって替ったりした。また山中で鍛錬した法力や舞や踊りを村人に示し、芸能の伝播にも貢献した。だが土地を得た山伏は同時に無法性も有しており、法力を呪いに用いたり、盗みを常識とするすり、すっぱ、らっぱといわれる悪党となったりもした。彼らは戦国の世に親分と呼ばれる傭兵となった。

カ やがて戦国の無頼漢たちは出世して武士となったが、折口信夫はその武士の道德である武士道は二つあったと指摘する。一つは正統的な武士道で、徳川の治世以降に儒教を取り入れて形づくられた。もう一つはそれ以前の野伏、山伏の素行の悪い「ごろつきの道德」であ

る。折口はごろつきの道德について、戦国大名の北条早雲の家来十数人が、主家が滅ぶときに捕虜時の好待遇の恩から割腹した話を引き、今日の俠客の雅量と同様であると説いた。

この問題は、解答欄 21 から 34 に解答すること。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(50点)

無数の「今様」の歌手たちのなかで後白河法皇が注目し、⁽¹⁾珍重していたのは美濃国「すの俣青墓」出身の芸能者たちであった。『梁塵秘抄』の「口伝集」のなかにはこの地名がなんべんもでてくる。たとえば、「……すの俣青墓の君ども、数多^{あまた}よび集めて、やうやうの歌をつくし」「……青墓のすの俣の者つどひてありしに、今様の談義ありて、様々の歌沙汰」「……すの俣の式部は、虫鳥の歌をよく歌ひて」といったふうに。

そして、この「すの俣青墓の君ども」のなかで後白河がとくに注目し、敬愛し、さらに師事したのは乙前^{おしまえ}という女性であった。「口伝集」によるとかれが乙前を知ったのは保元二(一一五七)年の正月。このとき乙前はもう七十歳をこえていたが、その⁽²⁾老練な歌唱法をきいた後白河は即座に彼女の伝授をうけることを決心する。そして乙前が仁安三(一一六八)年に八十四歳で死去するまで後白河は貪欲に学習をつづけた。乙前から「未だ知らぬをば習ひ、もと謡ひたる歌節違ふを一筋に改め習ひし程に、此れ彼れや様々も知りనికి」と「口伝集」にはしるされている。いや、「足柄」をはじめとするいくつもの秘曲を乙前から伝授されたことの興奮から後白河は『梁塵秘抄』を編纂する決意をかためたのだ、といってもよい。それほどにかれにとって乙前の存在は重要だった。じっさい「口伝集」をよめばよむほど、編纂者たる後白河の態度のなかには消えゆく無形文化財を記録する^(a)民俗学者のごとき研究心があったようにもみえるのである。

乙前だけではない。このころ後白河の記録のなかには「さはのあこまろ」「延寿」など固有名詞で何人かの「今様」の名手が登場するが、かれらはことごとく「すの俣青墓」からやってきた人物だった。つまり、後白河は「今様」の強力なパトロンであり、その民衆歌謡のプロダクションの所在地は青墓だったのである。

ここにいう「すの俣」とは「墨俣」あるいは「洲股」などとも表記し、美濃と尾張の境界線にあたり、源平合戦では源行家が平重衡に敗れ、承久の乱にあたっては北条政子の大決断によって東国武士団が後鳥羽院軍に圧倒的勝利をおさめたところ。近世にはいつてから織田信長の命をうけた木下藤吉郎が敏速な築城にあたって「一夜城」をつくったことでも有名なところである。

また青墓は『小栗判官』で小栗と照手姫との劇的な再会が果たされた場所であった。どうやら中世から近世にいたるまで青墓というところには特別な意味があったらしいのである。

いま地図のうえでじつとこの付近をながめてみると、ここは揖斐川、長良川、木曾川の三つの川がほぼ平行して南北に流れ、それにはさまれた巨大な中洲である。墨俣はこの中洲のなかの集落だったとみてもよい。その自然条件からこのあたりはしばしば水害に見舞われてきたから、集落を堤防でかこみ、住居群を石垣のうえに築き、小船を軒下に吊って洪水に備える輪中の生活様式を発達させた。さらに近世史をふりかえってみると、薩摩藩が治水事業を幕府から命じられ苦闘した「宝暦治水事件」の舞台もここであった。

後白河があれほどに注目していた青墓、そしてこれだけたくさん歴史を背負った青墓とは、いったいどんなところなのであろうか。このふしぎな地名のひびきに招きよせられ、わたしは青墓をたずねてみよう、とおもった。

いまここにゆくには名古屋から東海道本線を利用して荒尾駅または美濃赤坂駅で下車するか、あるいは大垣で養老鉄道に乗り換えて東赤坂までゆけばよい。大垣市の中心部からは五キロほどあるが、これらの鉄道をつかえばそんなに不便でもあるまい。

といったようなことを雑談のなかで口にしていたら、名古屋の友人たちが、それならいっしょにいこう、といって車でつれていってくれることになった。このあたりの高速道路はめんどくさくてわたしには見当がつかないが、とにかく、名古屋から名神高速でおよそ一時間、大垣インターチェンジを経由して、たちどころに青墓小学校のそばにピタリと到着した。

着いてみると、あたりはゆたかな農村地帯で、わたしたちがたずねた日はちょうど秋の穫りいれの真っ最中。小型のコンバインがゆつくりと黄金の稲穂のなかをうごいている。すぐそばには収穫したコメを処理するライスセンターがある。

北側のゆるやかな丘陵地の一部が削りとられて白っぽく屹立しているのは、それが金生山きんしやうざんという大理石の採掘場であるからだ。国会議事堂など日本の近代建築にはここで産出した大理石が使用されているというが、風景はまことにおだやかである。農家の軒先の柿の実があざやかに輝き、山ウグイスの声が遠くからきこえてくる。いったい後白河が「すの俣青墓の君ども」と特筆した「今様」の名手たちがこの(3)変哲もない平和な田園のどこで生まれ、どこでその美声をきかせていたのであろうか。現代の風景からすると想像することもできない。

しかし、そこから一キロほどはなれたところにある大垣市歴史民俗資料館をたずねてみて、(b)その理由がすこしわかってきた。それというのも、この資料館に隣接して美濃国分寺の遺跡がのこっているからである。いや、この遺跡が発見されたおかげで田んぼのまんなかに資料館が建設されたのだ、といったほうがたやすい。その資料館にはいつて見学すると、奈良時代に建立されたこの国分寺の規模は東西二百三十二メートル、南北二百四メートル。その敷地のなかに金堂を中心に伽藍や僧坊がならぶ堂々たる建築群であった。この遺構は大正五（一九一六）年に発見され、昭和四十三（一九六八）年から五十六年にかけて環境整備事業がおこなわれた結果、その壮大な原型がわかってきたのである。いまでもそのどかな農村だが、かつてはこの国分寺が奈良時代から平安期にかけて美濃平野にひときわ目だつランドマークだったのだろう。その意味

でおそらく青墓はこの地域で古代からつづく重要な象徴的空間だったにちがいない。

じっさい、いまも現地できくとここを「アオハカ」でも「アオバカ」でもなく「オウハカ」ないしは「オオバカ」と発音しているひとがいるのは、むかしここにたいへんな権力をもつ「王」がいて、その墳墓が青墓小学校の東にある国指定史跡の昼飯大塚古墳であるためともいう。もとより真偽のほどはさだかでないけれど、この付近の考古学的発掘の成果をみると、六世紀にさかのぼることのできる古墳がいくつも発見されているし、そのめぐまれた自然条件からみて有力な豪族が支配していたであろうことは容易に想像がつく。

青墓の田園風景のなかで、もうすこし知的散策をつづけると、このあたりが近江国と美濃国の国境にちかく、また日本列島中央部を東西にわかつ歴史の分水嶺とでもいふべき枢要の地でもあったことに気がつく。ふるいところからいうと、たとえば壬申の乱の主戦場もこの地域だった。七世紀なかば、天智天皇の没後、その弟にあたる大海人皇子は皇位をめぐって天智天皇の子大友皇子に反乱をおこす。出家して吉野にいた大海人皇子はひそかに美濃にむかい、そこで兵をあげた。いっぽう、大友皇子は近江の都から進出するが、結局のところ不破の関で大海人皇子の軍勢に敗退して大友皇子は自殺。そして反乱軍を指揮した大海人皇子が即位して天武天皇となったのである。

ぐっと時代がさがって、近世という時代を決定した関ヶ原の合戦もちょうどこの国境地帯がその舞台だった。くわしくいうなら慶長五(一六〇〇)年九月、この合戦の前日、東軍の先鋒をつとめる福島正則らが駐屯したのがまさしく青墓なのであった。べつなことばでいうなら、古くは王朝時代から近世にかけての日本史をつくってきた数々の「天下分け目」の合戦や謀略を青墓はみつめてきたのである。

美濃国分寺だけではなく、このあたりには寺社がかなり密集していたようである。おそらく青墓は国分寺を中核とした門前町のようなところがあり、それに付随して聖職者などが居住していただろうし、そこに聖俗未分化の芸能者集団がうまれていたであろうことも容易に想像できる。じっさい大江匡房は美濃を日本の傀儡師の誕生の地として記録しているが、それもおそらく青墓を中心とした地域をさしていたにちがいない、とわたしはおもう。

現在の名古屋で繁華街の一角を形成し、芸能の中心地になっている「大須観音」も、もともとは長良川の「大洲」にあったのを家康が移転させたものであった。おそらくその繁栄を尾張の城下に誘致しようというのがその理由だったのであろう。^(c) 現在からは想像もつかないような役割が青墓とその周辺にはあったにちがいない。寺社があれば門前には市がたつ。当然、にぎわう。芸能の徒が集結する。ここは公権力が介入できない聖地なのである。

なによりも、ここは旅人の往来する繁華の地でもあった。すぐそばの関ヶ原の宿は中山道と北国街道、伊勢街道の三つの交通路の交差する要衝であり、中山道を西からくると、関ヶ原宿、垂井宿、赤坂宿の順で並んでおり、青墓は垂井宿と赤坂宿の中間に位置している。一説によると、

もと青墓にあった宿場がのちに赤坂に移動したのだともいう。このような地理関係からみると、中世以来その東西南北にわたる往還がもたらした経済的効果が青墓にまでおよび、にぎわいをみせていたにちがいない。おそらく、青墓はそんな条件のなかで芸能者集団が活躍するにぎやかな街だったのであろう。

そんななかに出現した青墓の「今様」の歌手たちは洗練されたプロの芸能者であって、その名声は京都はもとより全国にひびいていた、と想像してよい。「すの俣青墓の君ども」といわれるほどの名手たちは、たぶんここに集結していたのである。

それだけ繁華の地であったということは、青墓が戦略的にもきわめて重要な役割をもっていたことを意味する。とりわけ源平入り乱れての武力衝突や政治的駆け引きのなかで、青墓は源氏がその勢力を東国から畿内につなぐ要衝であったことは当然であった。

じつさい、平安末期、この地域はすでに美濃源氏の支配下にあった。後白河の時代、清盛に敗れて東国に落ちのびてゆく源義朝が不破の関の裏道を抜けてやっとたどりついてひと安心したのが青墓であったのも容易に理解できる。その事情を『平治物語』はこういう。

「美濃国青墓の宿と申す所に、大炊と申す遊君は、頭殿（義朝）の年来の御宿の主也。其腹に姫御前一人まします、此の屋につかせ給ひぬ。

鎌田兵衛も、今様うたひの延寿がもとへつき候ひぬ。此の遊女共さまざまにもてなし候ふ……」

つまり青墓には義朝の定宿があり、そこには大炊という女性がいて、このふたりの間には女の子がいた、というのである。ついながら、この女の子が夜叉御前。彼女は頼朝、義経などとは異母きょうだい、ということになる。それほど深いつながりがあったのだから、義朝にしてみれば青墓こそが源氏勢力の西の最前線。そして安全地帯なのであった。

そんな経緯から、当然、大炊は義朝一行を追討軍から一時的にかくまうことになるのだが、なによりもおどろくのはこの文中に義朝の家来の鎌田兵衛をもてなした「延寿」という「今様」の歌手が登場していることである。この女性はさきほどみたように『梁塵秘抄』で「さほのあこまろ」などといっしょに京都にきて「足柄十首」とよばれる「今様」をつたえた歌手でもあった。つまり後白河はいっぱうでは義朝を軍事的に追討して青墓まで落ちのびさせながら、他方ではその逃亡者を隠匿した女性たちとともに「今様」に明け暮れる、というふしぎな行爲をみせているのだ。それを寛大とよぶか、無神経とよぶか、あるいは傲慢とみるか、は問うところではない。いずれにせよ、青墓という美濃平野のひとつの町にこの時代が集約されているのである。

物語はそこでおわるのではない。いったん大炊によって救われた義朝はここで態勢の立て直しを計画し、長男義平、次男朝長をそれぞれ飛驒国と信濃国に送りだし、これら周辺国で再挙をはかるように命ずる。だが、このふたりの息子のうち朝長は途中で敵の矢に膝を打ち抜かれ、雪道のなか信濃にゆくことは不可能になってしまった。青墓にいる父義朝のもとに帰ってきた朝長は「かなふべくは、いかでか御手にかからん」

とみずから首をさしのべ、義朝は涙ながらに我が子の首を打った。その朝長の墓も青墓の円興寺の境内にいまものこっている。この悲劇のあとまもなく、青墓に立ち寄った平宗清は大炊のはなしをきき、朝長の墓をあばいて首だけをもって京都に凱旋した、と『平治物語』という。その円興寺の旧七堂伽藍は丘陵の奥にあり、いまだずねてみると、現在の円興寺はさきほどの採石場を右手にみて谷間にはいったところに移転しているが、新旧いずれも崖にへばりついたような風情のあるうつくしい古刹である。⁽⁴⁾

我が子朝長を手にかけたその義朝も、この悲劇的経験のあとまもなく尾張国内海で謀計にかかって最後をとげる。芭蕉が『野ざらし紀行』で、「義朝の心に似たり秋の風」と詠んだのは、その故事による。なるほど、^(e)そんな心象風景が浮かんでもふしぎではない。わたしの青墓訪問は初秋のことだったから、空は青くさわやかであったが、夕方になると首をすばめるほど風は冷たかった。

源氏と青墓のふしぎな縁についてはなしをもうすこしつづける。

三男頼朝もまた京都を脱出して父義朝のあとを追った。さいわい美濃の山中で鵜飼に助けられ、やっと青墓の宿に着いたが、すでに義朝は殺害されたあと。したがって青墓はすでに源氏の安全地帯ではなく、すぐその場で捕虜になって伊豆に流されてしまう。だが、鎌倉幕府が安定すると、頼朝は命の恩人たる鵜飼に恩賞をあたえ、また青墓では大炊を訪ねて妹の夜叉御前と再会をはたすことができた。

また常盤御前とともに幽囚の日々を京都で送っていた頼朝の弟、牛若もやがて金売り吉次にとまわれて奥州にむかう。京都をでてまもなく吉次一行は鏡の宿で熊坂長範を首領とする強盗団に遭遇し、牛若がかれらを討ち取る。鏡の宿というのはいまの滋賀県竜王町。そしてやがて美濃の国にはいった牛若は青墓に立ち寄って兄朝長の墓所をたずねることになる。その事情を『義経記』はこうしるす。

「……番場・醒井過ぎければ、今日も程なく行き暮れて、美濃国青墓の宿にぞ着き給ふ。是は義朝浅からず思ひ給ひける長者が跡なり。兄の中宮大夫の墓所を尋ね給ひて御出であり。夜と共に法華経誦誦して明くれば卒塔婆を作り、自ら梵字を書きて供養してぞ通られける」

牛若、つまり義経と青墓のかかわりについては、そのほかにもさまざまな余話がある。たとえば『烏帽子折草子』によると牛若は青墓でかつて用明天皇が愛用されたという「草刈りの笛」を吹き、それが機縁で青墓の長者、すなわち大炊に会って義理の母子の奇遇に涙した、ということになっていて、その故事にちなんで青墓小学校のすぐそばには長者屋敷跡、という一郭があり、そこには牛若が一本の芦^よを立てた、という案内がある。それによると、牛若はここで、「さしをくも形見となれや後の世に源氏栄えはよし竹となれ」という歌をよみ、その芦から竹が生えたのでここを「よしたけあん」という、とある。その「よしたけあん」のあったとされる場所にはいまはひっそりと青墓公民館があり、その前庭にはなぜか真っ赤なスポーツカーが駐車していた。そのあたりに立ってみると一キロほどはなれたところにさきほど紹介した美濃国分寺跡が望見できる。

はなしはさらに脇道にそれるが、牛若の母、常盤御前が牛若を追って東国にむかう途中、青墓の手前、山中宿で盗賊の手にかかって息絶えた、という物語も幸若舞の『山中常盤』にえがかれている。また、さきほどかかげた芭蕉の句も「います（今頃）・山中を過ぎて、いにしへ常盤の塚有り」という文章につづいているのである。

こうした⁽⁵⁾口碑伝説からみると、青墓は旧体制を代表する京都と新興勢力としての鎌倉というふたつの権力が交錯する結節点、といってもよいだろう。じつさい、日本交通史をふりかえてみると、かつて京都から「みやこ」という空気をはこんでいた東西をむすぶ幹線道路は十二世紀の鎌倉幕府成立を契機にしてこんどは鎌倉からやってくる「あづま」という名のあたらしい空気とこのあたりで混合しはじめていたようである。この幹線道路のことを「鎌倉街道」という。

「鎌倉街道」というのはいうまでもなく鎌倉幕府の総司令部たる鎌倉と各地をむすぶ交通路のこと。主として関東地方で整備され「上の道」は鎌倉から藤沢、町田、府中、寄居を経由して信濃につながる道、「下の道」は東京湾沿いに上総、下総にでる道。坂東武者がその管理にあたった。国道、地方道の整備されたこんにちでも俗称「鎌倉街道」という道路名はいまも関東平野のあちこちにのこっている。それは「あづま」というあたらしい文化を各地に伝播し維持する大動脈のようなものであった、といってもよい。

この流れは関東平野ぜんたいに浸透しただけではなく、箱根をこえて西にもむかった。その結果、古来、七道のひとつとしてかぞえられていた「東海道」は「京鎌倉往還」ともよばれ、東海圏でもその一部がやがて^(f)「鎌倉街道」という異名をもつようになっていたようである。現在の愛知、岐阜両県にもその痕跡はのこっており、尾張一宮から木曾川沿いに北上し、安八方面につながる「美濃路」の一部は別名「鎌倉街道」とよばれていた。いまの安八には「歴史の道」という史跡公園があつて、その掲示板にはちゃんと「鎌倉街道」の経路がしめされている。名古屋市内にある「小栗橋」もこの街道を通過したとされる小栗判官に⁽⁶⁾ちなむものだ。

いま、青墓という地名はおおくの日本人にとってほとんどなじみがないが、こうした事情をふりかえてみると、この付近一帯は日本地図のうえでの「忘れられた小都市」なのではないか、とさえおもわれるのである。想像力によってそのころの日本文化地図をえがいてみるなら、このあたりには京都と鎌倉のあいだを往復する旅人たちが行き交い、情報を交換し、ときには歓談し、ときには衝突し、にぎやかな世界をつくりだしていたにちがいない。伝統的な「みやこ」と新興勢力としての「あづま」と、そのふたつの文化がここで接触して、おそらく言語や風俗にも混合現象がみられていたにちがいない。また、ふたつの文化のあいだの力関係も青墓宿のあたりで観察してみれば感じとれたであろう。現代ふうにいえば、このあたりは^(g)「異文化間コミュニケーション」の接点だったのである。

じじつ、『十六夜日記』の著者阿仏尼が高齢を押して鎌倉までの旅を決意したのはべつだん風雅をもとめてのことではなく、藤原為家の遺産

相続にかかわる問題の決裁を鎌倉幕府に訴えるためだった。播磨国の荘園の所有権でさえ、もはや京都の宮廷の専決事項ではなく、鎌倉が決定するようになっていたことがこの経緯からもわかる。なにごとくも鎌倉。阿仏尼は「東の亀の鏡に映さば、曇らぬ影もや顕はる」と、せめて思ひ余」った結果「いざよふ月に誘はれ」て鎌倉への旅にでかけたのであった。

時代がややさがって十五世紀になると、一条兼良が文明五（一四七三）年に奈良から美濃に旅行したときの記録『藤河の記』には、「青墓といふは垂井よりこなたなり。名寄に青墓里といへる、この事にや。契あれば此の里人に青墓のはかならずは又も来て見ん」とある。名寄というのは歌枕のことだから、この時代には「青墓の里」というところの知名度は高くなっていたのであろう。じじつ、後世になっても青墓の地名はときどき記録のなかに顔をのぞかせる。元治二（一八六五）年、つまり幕末の動乱期に記録された『中仙道十四垣根』にも青墓は「面白キ土地ナリ……名所多シ風流ノ里ナリ」としるされているのである。

すでにみたように、「すの俣青墓の君ども」すなわち『梁塵秘抄』に収録されている歌謡の名手たちのふるさとたる青墓は交通繁華の要衝であり、東西南北の旅行者たちがにぎわしく往来していた。とすれば青墓の芸能者たちは宿を通過する旅人たちのはなしに耳をかたむけているだけでも、同時代の日本各地の最新情報におのずからふれていたはずである。

（加藤秀俊『メディアの発生』）

（注）○今様——平安時代後期の流行歌謡。

○梁塵秘抄——後白河法皇が編纂した今様歌謡集。歌謡評論の「口伝集」を付す。

○傀儡師——人形遣いの芸人。

○歌枕——和歌に詠まれる地名。

問一 二重傍線部 (1)・(2)・(3)・(4)・(5)・(6) の意味として最もふさわしいものを、次の ア～オ の中からそれぞれ一つずつ選び、(1) は解答

欄 21 に、(2) は 22 に、(3) は 23 に、(4) は 24 に、(5) は 25 に、(6) は 26 にマークしなさい。

- (1)
- 21
- ア 変なところを面白がる
イ 新奇なものを評価する
ウ 有難がって大切にすること
エ 異例の慎重さで扱う
オ 希少価値を誇示する
- (2)
- 22
- ア 年老いて頑固な
イ あざとく巧妙な
ウ 枯れて自由自在な
エ 年功を積み柔軟な
オ 経験豊富で達者な

- (3)
- 23
- ア 特に変わっていないこと
イ おだやかで平和なこと
ウ 急激な変革を起こすこと
エ 危険な状態にあること
オ 普通とは違っていること
- (4)
- 24
- ア 歴史のある寺院
イ 定評のある名所
ウ 由緒のある古墳
エ 荒れ果てた遺跡
オ すばらしい風景

- (5)
- 25
- ア 口語で書かれた碑文
イ 昔ながらの口跡
ウ 口頭による啓示
エ 古くからの言い伝え
オ 記録すべき文化財
- (6)
- 26
- ア 命名を頼む
イ 所縁を持つ
ウ 影響される
エ 名を模倣する
オ 親しくなじむ

問二 傍線部 (a) の説明として最もふさわしいものを、次の ア～オ の中から一つ選び、解答欄 27 にマークしなさい。

ア 世間一般からは文化的価値など全く無いと見なされていた今様に光を当て、青墓の古老である乙前からさまざまな口伝の聞き取り調査を行った後白河の探究心が、昔話や伝説といった目に見える形では残らないものに文化的な価値を認め、それを記録に残そうとする民俗学者の研究意欲に類似しているということ。

イ 年老いた乙前の素朴な唱法に独特の魅力を感じ、その洗練された技能を何とか習得したいと願って地道に今様の伝習に励もうとする後白河の探究心が、民具や農具といった文化財としては評価されていなかったものに文化的な価値を認め、それを記録に残そうとする民俗学者の研究意欲に類似しているということ。

ウ 青墓の歴史の生き証人である乙前が聞き伝えてきたさまざまな秘伝を、今のうちにできるだけ記録に残しておかなければならないと考えた後白河の探究心が、慣習や信仰といった目に見える形では残らないものに文化的な価値を認め、それを記録に残そうとする民俗学者の研究意欲に類似しているということ。

エ 名人の乙前から極秘の曲を伝授されたことを契機として、秘密のある隠された伝承に対する知的興奮に導かれるまま今様の研究を進めていった後白河の探究心が、祭祀や儀礼といった形を持たない隠された秘儀に文化的な価値を認め、それを記録に残そうとする民俗学者の研究意欲に類似しているということ。

オ 高齢の乙前が亡くなれば伝承する者もいなくなり消滅してしまうであろう今様の秘曲を、今のうちに記録しておかなければならないと考えた後白河の探究心が、技能や伝承といった目に見える形では残らないものに文化的な価値を認め、それを記録に残そうとする民俗学者の研究意欲に類似しているということ。

問三 傍線部 (b) の説明として最もふさわしいものを、次の ア～オ の中から一つ選び、解答欄 28 にマークしなさい。

ア 現地を訪ねてみると青墓は稲穂が実るゆたかな田園地帯だったので、このような恵まれた土地なのにわざわざ今様を歌わねばならなかったのかを初めは不思議に思ったが、かつてここには国分寺が建っていたことを知り、広大な農地は存在していなかったことが徐々に見えてきたということ。

イ 現地を訪ねてみると青墓は平和でのどかな田園地帯だったので、この地のどこに行ったら今様の名手たちの美声を聞くことができるのか初めは不思議に思ったが、ここには歴史民俗資料館があることを知り、古くから文化水準の高い象徴的な空間であったことが徐々に見えてきたということ。

ウ 現地を訪ねてみると青墓は特に何もないのどかな田園地帯だったので、なぜこの地が今様の名手たちを多数輩出したのかを初めは不思議に思っていたが、かつてここには国分寺があったことを知り、古代には美濃国の中でも目立つ象徴的な空間であったことが徐々に見えてきたということ。

エ 現地を訪ねてみると青墓は稲穂が実るゆたかな田園地帯だったので、なぜ田んぼのまんなかに歴史民俗資料館が建っているのかを初めは不思議に思っていたが、たまたまここに遺跡が発見されたために資料館が建設されることになったことを知り、過去の経緯が徐々に見えてきたということ。

オ 現地を訪ねてみると青墓は平和で静かな田園地帯だったので、この地で今様の名手たちが大声で歌唱を競いあっていたということを初めは不思議に思っていたが、かつてここには大きな国分寺があったことを知り、人々が集まるにぎやかな場所であったことが徐々に見えてきたということ。

問四 傍線部(c)の説明として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、解答欄 29 にマークしなさい。

ア 現在の名古屋の繁栄ぶりからは想像もできないが、かつては青墓の方が小都市としてにぎわっており、東海圏における経済と文化の中心地としての役割を果たしていたということ。

イ 繁華街の一角にある現在の大須観音のぎやかさからは想像もできないが、かつての青墓は平和でのどかな田園地帯であり、疲れた人々の心を癒す役割を果たしていたということ。

ウ スポーツカーを乗り回すような世俗的な空間に変貌してしまった現在の青墓からは想像できないが、かつてこの地は清らかな宗教的聖地であり、神聖な役割を果たしていたということ。

エ のどかな田園地帯である現在の青墓からは想像できないが、かつてこの地は寺社の集まる宗教的聖地であり、芸能者を養成するにふさわしい場所という役割を果たしていたということ。

オ 幹線道路から外れた現在の青墓からは想像できないが、かつてこの地は三つの街道と三つの川が集まる交通の要衝であり、全国各地からの情報を集める役割を果たしていたということ。

問五 傍線部(d)の理由として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、解答欄 30 にマークしなさい。

ア 源朝長の追討を命じた後白河は、その朝長の逃亡を青墓で助ける側にいた大炊とも交流があつて、ともに平然と今様を楽しむ関係であつたということを見ると、なんとなく行動に一貫性がなくて矛盾しているようにも見えてしまうから。

イ 源頼朝の追討を命じた後白河は、その頼朝の逃亡を青墓で助ける側にいた延寿とも交流があつて、ともに平然と今様を楽しむ関係であつたということを見ると、なんとなく行動に一貫性がなくて矛盾しているようにも見えてしまうから。

ウ 源義朝の追討を命じた後白河は、その義朝の逃亡を青墓で助ける側にいた延寿とも交流があつて、ともに平然と今様を楽しむ関係であつたということを見ると、なんとなく行動に一貫性がなくて矛盾しているようにも見えてしまうから。

エ 源義朝の追討を命じた後白河は、その義朝の逃亡を青墓で助ける側にいた大炊とも交流があつて、ともに平然と今様を楽しむ関係であつたということを見ると、なんとなく行動に一貫性がなくて矛盾しているようにも見えてしまうから。

オ 源頼朝の追討を命じた後白河は、その頼朝と一緒に鎌田兵衛をもてなした延寿とも交流があつて、ともに平然と今様を楽しむ関係にあつたということを見ると、なんとなく行動に一貫性がなくて矛盾しているようにも見えてしまうから。

問六 傍線部(e)の理由として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、解答欄 31 にマークしなさい。

ア 芭蕉が想像した「義朝の心」というのは、死んだ我が子を大事に思うやさしく温かい気持ちを意味しており、筆者が青墓で実感したおだやかな田園の風と芭蕉が思い浮かべたイメージとが、いかにも似つかわしいように思われたから。

イ 芭蕉が想像した「義朝の心」というのは、死んだ我が子をいつまでも思い続ける弱い気持ちを意味しており、筆者が青墓で実感したぼんやりとした雰囲気と芭蕉が思い浮かべたイメージとが、いかにも似つかわしいように思われたから。

ウ 芭蕉が想像した「義朝の心」というのは、我が子をも手にかけることのできる非情で冷静な気持ちを意味しており、筆者が青墓で実感した厳しい寒風と芭蕉が思い浮かべたイメージとが、いかにも似つかわしいように思われたから。

エ 芭蕉が想像した「義朝の心」というのは、自ら我が子を手につかねばならなかったつらく悲しい気持ちを意味しており、筆者が青墓で実感した冷たい風と芭蕉が思い浮かべたイメージとが、いかにも似つかわしいように思われたから。

オ 芭蕉が想像した「義朝の心」というのは、我が子に先立たれてしまった親の空虚ではかない気持ちを意味しており、筆者が青墓で実感したさびしい田園の風と芭蕉が思い浮かべたイメージとが、いかにも似つかわしいように思われたから。

問七 傍線部(f)の理由として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、解答欄 32 にマークしなさい。

ア 「東海道」は古くからある道で、京都という中央から地方に文化を発信する交通路という意味を長らく担ってきたが、鎌倉幕府の成立を機に、鎌倉から各地に文化を発信する交通路という新たな意味が生じたから。

イ 京都と鎌倉を結ぶ「東海道」はもともと「京鎌倉往還」とも呼ばれる幹線道路であったが、東海圏のあたりは旧体制である京都の朝廷よりも、新興勢力である東の鎌倉幕府の方に心情的な親しみを感じていたから。

ウ かつては七道のひとつにかぞえられていた幹線道路の「東海道」が、鎌倉幕府の成立を機に七道からは外されてしまい、関東平野のあちこちにある「鎌倉街道」のひとつであると考えられるようになっていったから。

エ 京都の権力が弱体化するにつれ、それと入れ替わるように鎌倉の権力が強大化していったことによって、「京鎌倉往還」とも呼ばれていた「東海道」も、やがて「鎌倉街道」という名称に統一されるようになったから。

オ 「鎌倉街道」は関東平野のあちこちに古くからある交通路であったが、その道が次第に箱根をこえて西の方へと広がってゆき、ついには「東海道」の一部と連結して大動脈のような幹線道路へと発展していったから。

問八 傍線部 (g) の説明として最もふさわしいものを、次の ア～オ の中から一つ選び、解答欄 33 にマークしなさい。

ア 古来青墓のあたりは歴史の分水嶺とでもいうべき枢要の地であり、二つの勢力が衝突する合戦や謀略が行われた場でもあったため、都の文化と東国の文化という二つの異なる文化が激しく衝突し、対立が生まれるような場所になっていたということ。

イ 古来青墓の付近は東西南北から旅人が往来する交通の要衝であり、京都と東国という二つの権力が交差する接点でもあったため、都の文化と東国の文化という二つの異なる文化が接触し、相互に影響を与え合うような場所になっていたということ。

ウ 青墓宿はもとの赤坂宿であり、交通の要衝であった関ヶ原宿にも近く、京都に行くにも鎌倉に行くにも便利な場所であったため、都の文化と東国の文化という二つの異なる文化が合流し、最新の情報が集まってくるような場所になっていたということ。

エ 青墓の周辺はもともと東西南北から旅人が集まってくる交通の要衝であり、京都と東国のどちらに行くことも可能であったため、都の文化と東国の文化という二つの異なる文化が混合し、人や物が行き交うにぎやかな場所になっていたということ。

オ 青墓の付近一帯には鎌倉街道が通っており、それを通じて鎌倉から京都へと文化や情報が運ばれていたため、青墓宿のあたりで都の文化と東国の文化という二つの異なる文化が交流し、東国の異文化が理解されやすい場所になっていたということ。

問九 本文の内容としてふさわしいものを、次の ア～ク の中から二つ選び、解答欄 34 に二つマークしなさい。

ア 青墓出身の今様の歌手の中で後白河が最も尊重したのは乙前であり、後白河は乙前に秘曲を伝授している。

イ 青墓付近の山で採取された大理石は、国会議事堂の建築にも使用されている。

ウ 高齡の阿仏尼が京都から鎌倉へ行く風雅の旅に出たのは、十六夜の月に誘われたからであった。

エ 一条兼良が鎌倉から美濃へと旅行したときの記録にも、青墓という地名が和歌の名所として出てくる。

オ 天智天皇の弟である大海人皇子が、天武天皇の子である大友皇子と戦った主戦場は青墓の近くである。

カ 追討から逃れた源義朝は、長男義平を尾張国に、次男朝長を信濃国に送り、再起を果たそうと計画した。

キ 長良川の近くにあった大須観音を尾張の城下に移転させたのは、尾張城主の織田信長である。

ク 青墓には、源義経が草刈りの笛を吹いたという伝説や、義経が立てた芦が竹になったという伝説がある。

3

〔神道文化学部、法学部、経済学部、人間開発学部、観光まちづくり学部の 必須。文学部は解答しないこと〕

この問題は、解答欄 41 ～ 52 に解答すること。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(50点)

ある場所に対して親しみを覚える、ということはいかなることか。それを考えていくにあたって、I「場所」とはなんなのか、この基本的な概念の持つ意味について整理していきましょう。

通常のことばづかいで言えば、場所とはある物理的な空間のことを指していると考えられています。家、大学、お気に入りのカフェ、行ったこともないニューヨークの街並みなど、そのどれもがこの地球上でそれぞれの物理的な空間を基盤としています(地球を飛び出して、火星や月にも特定の物理的空間があるでしょう)。

しかしハアパラは、場所ということには、時にそれ以上の含みがあるのだと指摘します。場所はたんなる空間であるだけではなく、私たちの生活のなかで独特の意味を帯びた対象になりうるのです。

II、私はパリを訪れるたびに、その景観には感心してしまいます。どこまで行っても、絵巻物のように続いていくパリの街並みはやはり、美しいものに思えます。しかし、それはたんに美しい建物がたくさんあり、街路樹の並ぶ大通りがあるといった、見た目のみによるものではないでしょう。

III、これらの景観が出来上がった背景にある、パリの人々の歴史や暮らしを感じ取ることができるからこそ、心が強く動かされるように思います。人々の文化と歴史がパリの精神を構成しており、そうした目には見えないはずのものがこの都市の景観のうちに不思議と滲み出てきて、感じ取ることができるようになっていくのです。

このように、場所は、そこに暮らす人々が紡ぎ上げてきた歴史や文化によって立ち現れてくるものです。もしも、現在パリと呼ばれている土地にまったく別の人々が住み着き、まったく異なる歴史が展開していたら、そこには現在のパリとはまったく異なる場所が出来上がっていたはずだと想像できるでしょう。

こう考えてみると、「場所」とはたんに空間を指すのではなく、その空間で人々(あるいはそのほかの要素)が過ごしてきた⁽¹⁾来歴が積み重なっているものと言えます。つまり、^(a)空間と私たちとの関係性を抜きにして、場所を十分に理解するのは難しいのだということになります。

「場所は私たちとの関係性を抜きにしては語れない」ということからさらに進んで考えてみると、この「私たち」という括りの粗さに気づきます。歴史的にみてパリの人々が作り上げてきた都市景観が今ここにあるとして、それを見ている私がどんな人物なのか——私のように旅行でやってきただけなのか、私が訪ねた友人のように仕事の都合で一定期間そこで暮らしているのか、生まれながらのパリの人なのか——今ここで、その場所に立っている「私」の⁽²⁾属性によって、その場所が持つ意味もまた変わるのです。

このようにハアパラは、文化や歴史といった大きな物事を介してというよりも、^(b)私たち個々人がその空間とどのような関係にあるかによっても、異なる場所が経験されるということを掘り下げて考えます。そこで彼は、「新奇さ」と「親しみ」という概念に注目します。

新奇さとは、馴染みのない場所を訪れたときの、目にするもの、耳に飛び込んでくるものなど、そのすべてが自分にとって新しいものに感じられる気持ちのことを指しています。新しいものに触れることで楽しいと思う、そのとき心に生じる快さに、ハアパラは新奇さということばを割り当てています。

たとえば、私は二〇二三年、新型コロナウイルスによるパンデミック以降、初めての海外出張に出かけました。向かった先はハンガリーのブダペシュトで、私にとってはまったく初めて訪れる街でした。世界遺産にも登録されている、非常に美しい街並みがそこには広がっていました。ドナウ川の流れ、さまざまな⁽³⁾意匠が施された建築。そうした明らかに美しいものだけではなく、^(c)おそらく現地の人々にとってはなんてこともないようなビルや車の流れ、スーパールの陳列棚などにも、私の目は惹きつけられます。

このとき、目を始めとする私の諸感覚は、地元にいるときよりもずっと活動的になり、周囲の環境を知覚することに勤しんでいます。私は「よそのもの」として、好奇心を抱きながら街を眺めます。馴染みない場所は、私たちに対して、ものを見ることにより敏感になるように要求するのです。

しかし、同じ土地で一定の期間を過ごす場合、私たちはいつまでも最初のままのよそのものにとどまるわけではありません。ハアパラによれば、^(d)私たちは土地を「解釈」することを通じて、新奇さを感じることから、むしろ親しみを感じるほうへと徐々に移行していくのです。解釈と言うと、「ここでの作者の考えを説明せよ」といった、現代文の問題のようなものを想定する人もいるかもしれませんが。唯一の正解がすでにあって、そこに向かって進んでいくというイメージです。

ですが、ここでいう解釈はまったく別の意味です。少しことばを柔らかくして言うならば、この場合の解釈は（ある場所と自分との関係を、ていねいに築いていくこと）を意味しています。最初から想定されている正解はありません。自分がその場所で時間を過ごすことを通じて、自分なりの意味をその環境のうちに見出していくことを解釈と呼ぶのです。

私は数年前、現在住んでいる街へ引っ越してきました。下見に訪れたとき、駅前からこぢんまりと、しかし確かに活気のある商店街が続いている風景に新奇さを感じつつ住み始めたわけですが、実際に住んでからは、その商店街を使って生きていくことになります。眺めるだけではなく、その商店街が日々の食卓から贈り物のクッキー、テーブルに飾る花、子どものオムツなどの日用品を購入したりするための場所となっているのです。歩いていてもなにも気にならないような、自分にとって当たり前のものへと、その街は変容していく——つまり、その街は「私の場所」になっていくのです。これが土地を解釈することです。

ハアパラは、新奇なものを親しみあるものに変換することを、ある場所を「家化」することなのだと言っています。私たちにとっての「家」とは、寝起きや食事をする空間としての住居だけではなく、その外側にまで広がります。「ホームタウン」とは、ただそのなかにホームがあるタウンのことを指すのではなく、タウンそのものがホームとなっている、街全体が私たちにとって特別な場所のことを指しているというのは、私たちの実感から大きく逸れる考え方ではないように思います。

しかし、ある場所とそのような親密な関係を結ぶことによって、私たちは逆に、そこにあるものに注意を払うことがなくなっていきます。そのような場所では、周囲にあるものをきちんと見るために、特別な努力をしなければならないことがしばしばあります。建物の解体や新築などのきっかけがないと、私たちは周囲の環境を見ないものです。

^(e) 慣れ親しんだ場所は、生活の背景になります。だからといって、そこが自分にとってどうでもいい場所になったのではなく、むしろ自分の日常の欠かせない構成要素になっている——このような場所に私たちは愛着を感じるのであり、親しみの感情が現れてくるのです。

（青田麻未『ふつうの暮らし』を美学する』光文社新書）

（注）○ハアパラ—アルト・ハアパラ。フィンランドの美学者。

問一 空欄 I Ⅰ Ⅲ に入るものとして最も適切な言葉を、次の ア～キ からそれぞれ一つずつ選び、
 I は解答欄

41 に、Ⅱ は 42 に、Ⅲ は 43 にマークしなさい。

ア ところで イ むしろ ウ しばしば エ したがって オ たとえば カ しかし キ そもそも

問二 二重傍部 (1)・(2)・(3) の意味として最もふさわしいものを、次の ア～オ の中からそれぞれ一つずつ選び、(1) は解答欄 44 に、(2)

は 45 に、(3) は 46 にマークしなさい。

(1)
 44 ア 由緒
 イ 場面
 ウ 因縁
 エ 習慣
 オ 時間

(2)
 45 ア 出来事や人に対する評価の指針
 イ 存在本来のあるべき性質
 ウ 精神や実体が置かれた状況
 エ 物事や人を特徴づける要素
 オ 人や物が帰属している集合

(3)
 46 ア 形式的造形
 イ 装飾的考案
 ウ 歴史的紋章
 エ 色彩的工夫
 オ 計画的作為

問三 傍線部(a)の理由として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、解答欄 47 にマークしなさい。

- ア 場所は物理的な空間を基盤とするだけでなく、そこに暮らす人の歴史が織り成す景観の美によっても意味づけられるものであるから。
- イ 場所は特定の物理的空間として立ち現れるが、同時に街並みの景観の構成要素としての側面を看過することができないものであるから。
- ウ 場所は物理的な空間としてだけでなく、時代と精神とを概念化することで歴史を可視化する装置として機能するものであるから。
- エ 場所はある物理的空間が空間としてそのまま存在するのではなく、景観を通じて文化に心を強く動かされるような体験を人に提供するものであるから。

オ 場所はたんなる物理的空間であるばかりでなく、そこに暮らす人たちが紡ぎあげて来た歴史や文化によって独特の意味を帯びるものであるから。

問四 傍線部(b)の説明として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、解答欄 48 にマークしなさい。

- ア その空間で育まれた文化と歴史だけではなく、立場の異なる新しい訪問者の存在によって場所は変わり続けるということ。
- イ その空間の背景にある文化や歴史のみならず、そこにどんな者が関わるかによっても場所は違った意味を持つということ。
- ウ その空間で暮らしている者たちの精神にかかわらず、訪ねた者の属性によって場所は異なる様相を呈するということ。
- エ その空間が醸す歴史に裏打ちされた雰囲気のみならず、関わる者の考えや好みによっても場所の価値がきまるということ。
- オ その空間に感得される歴史的文化ばかりでなく、訪問者の出自によっても場所の見せる表情が異なってくるということ。

問五 傍線部(c)の理由として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、解答欄 49 にマークしなさい。

- ア 美しい場所に出会うことによって、地元にいるときより活動的になり、周囲の環境全体を広く見渡せるから。
- イ 異なる場所での体験によって、気分が高揚し、普段なら等閑視するありふれたものでさえ快く感じるから。
- ウ 初めての場所を経験することで、諸感覚が鋭敏になり、少しの違いでも見つけ出すことが出来るから。
- エ 馴染みのない場所に立つことで、感覚全体が活性化され、あらゆるものが目新しく興味深く感じるから。
- オ 久しぶりに海外を訪れて探求心が刺激され、いつもは目も止めない何気ないものに美の本質を実感するから。

問六 傍線部 (d) の説明として最もふさわしいものを、次の ア～オ の中から一つ選び、解答欄 50 にマークしなさい。

ア 馴染みのない新鮮な場所を繰り返し訪問し、その空間の背景にある文化や歴史を実感して自身のものにするを通じ、その空間を
かけがえのない私の居場所にして行くということ。

イ 知らない土地にある程度の時間に渡って住み続けてその土地と深く関係を結んで、隠されていた真の姿をそこに見出すことで、ホーム
タウンと呼びうる愛着を感じるようになるということ。

ウ 同じ土地で一定の期間過ごして環境と自分との関係をじっくりと築きながら、独自の意味を見出していくことによって、馴染みのない
目新しい場所が自分の場所になって行くということ。

エ 好奇心に駆られて住み始めた土地で生活を営みながら、自分なりの価値をその空間に付与し続けることによって、新しさに代わって親
しみが強くなってその場所に依存し始めるということ。

オ 土地に住み土地を感じ続けその空間を生活の基盤としていくことで、そこにいるだけで諸感覚が鋭敏となる新鮮な場所がどこか懐かし
さを感じさせるような場所へと変化して行くということ。

問七 傍線部 (e) の説明として最もふさわしいものを、次の ア～オ の中から一つ選び、解答欄 51 にマークしなさい。

ア 「私の場所」となった空間であれば、もはや周囲の環境に注意を払うことはなくなるが、だからと言ってそこで暮らして来た歴史が失
われてしまうわけではないということ。

イ 親密な関係となった場所にあつては、新奇な空間にあるときのような感覚の鋭敏さは影を潜めるが、その空間が日々の暮らしの大事な
一部となっているということ。

ウ 「家化」した場所では、特段の注意を払うことなく快適な生活を送ることが出来るが、その一方で、感性に訴えてくる目新しいものに
出会うことが難しくなるということ。

エ タウンそのものがホームとなっているような場所においては、その空間を構成してきた文化や歴史から遠ざかり、自分の居場所だとい
う愛着が増してくるということ。

オ ていねいに日々の暮らしを送ってきた場所では、唯一の答えを求めるのではない解釈は役割を終え、その日常の豊かさが何よりも大切
であると実感するようになるということ。

問八 問題文の内容としてふさわしいものを、次のア～カの中から二つ選び、解答欄 52 に二つマークしなさい。

ア 人はその本質として新奇なものを好みながら、一方では馴染みの空間に心地よさを覚えてしまう。

イ パリの街並みに心動かされるのは、その景観の背景にある歴史や文化の存在を感じ取ることが出来るからだ。

ウ ハアパラは取り巻く環境に自身を構成している文化や歴史を見出すことを「解釈」と呼んでいる。

エ スーパーの陳列棚のような日常的なものを新鮮に感じられるのは、その街が「私の場所」となったからだ。

オ 自身の日常を構成する外すことの出来ない要素となった場所に、人は親しみを感じて注意を払わなくなる。

カ 自分にとって当たり前のものと変わった街並みは、「家化」されていて私の歴史の背景となってしまう。